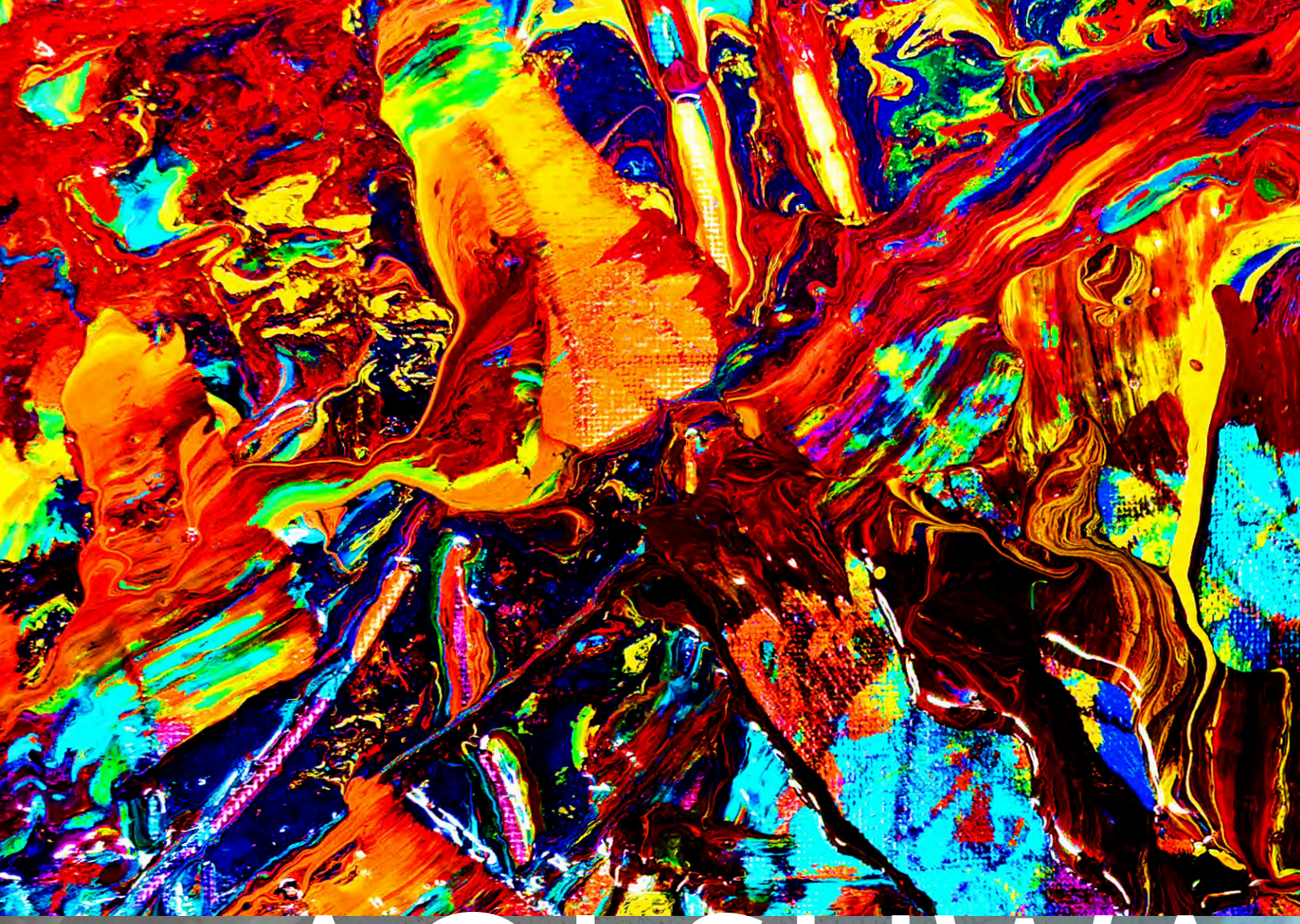


AOI SUWA

Artist Statement

現象する世界と「わたし」の間にある領域を探る

この世には現れては消えていく、数多の現象が存在する。
むしろ明滅するそれらの現象によって世界は構成されている、と言った方が近いかもしれない。
目の前に現前した現象にはたと立ち止まる時、「わたし」の意識と世界は触れている。
その瞬間、「わたし」と世界の間にある関わり合いが生じる。
それは所謂平面的な姿で出現することもあれば、立体的な空間でしか感じられない質感であったり、
複数のメディアを行き来することでしか見えない「動き」自体であったりする。
直接他者と共有し得ないけれども私秘的に存在する、
或る跳躍的な領域や感覚を浮かび上がらせることが、
私の芸術実践活動の根幹である。

Background

原体験について

小学校の時、理科の先生が化学反応で液体の色が変わる化学実験を見せてくれた。目の前で色が変化する瞬間、何とも語り得ない強い実感がそこにあった。そんなことが起こり得るのであれば、「それ」こそ私が追いたいものだと、少し捕まえたと思った。自然現象の知覚によって湧き上がる自分の感覚との鮮烈な出逢いだった。その時の化学反応は、言葉で言うなら「酸化還元反応」として説明することができるが、私が感じた「それ」はそれでは説明はつかなかったので、私秘的な領域の内にある感覚として大事に持っておくことにした。そのような感覚の置き場が「絵」だったり「写真」だったりしたので、「描くこと」に対する考えや感覚も、私秘性と隣り合わせに在る。私の作品はその原体験を辿るための装置であったり、そのような感覚による世界に対する反射的な何かであったり、そこから突然自立して生まれる何かの出現であったりする。私にとっての「科学」は、非言語的実感を伴って確かに在り、それを伝え得る状態にした／なった何かが、結果として私にとっての「美術」になっているのではないかと、今では改めて考えている。

諏訪葵
Aoi Suwa

1991　東京生まれ

学歴

2014　武蔵野美術大学 油絵学科油絵専攻 中退
2018　東京藝術大学 美術学部 絵画科油画専攻 卒業
2018　東京藝術大学 大学院 美術研究科 油画第五研究室 修士課程 入学
2019　ロンドン芸術大学 Central Saint Martins MA Art & Science 交換留学
2021　東京藝術大学 大学院 美術研究科 油画第五研究室 修士課程 修了
2021　東京藝術大学 大学院 美術研究科 油画第五研究室 博士課程 入学

賞歴

2015　コニカミノルタソーシャルデザインアワード アート部門入選
2017　「2074、夢の世界」アワード 入選
2018　O氏記念賞
2018　JIDF学生文化デザイン賞 2018 入賞
2019　NONIO ART WAVE AWARD 2019 準グランプリ受賞
2020　ゲンビどこでも企画×ゲンビ「広島ブランド」デザイン スペシャル公募2020 入選
2020　オンライングローバルアートイベント「Be-coming Tree」 企画採択
2021　群馬青年ビエンナーレ2021 入選
2021　2020年度 京成電鉄藝術賞
2021　東京藝大アートフェス2021 優秀賞
2021　上野芸友賞
2022　第2回 KYOBASHI ART WALL 奨励賞
2022　グッドデザイン・ニューホープ賞 「場」のデザイン部門 入選

助成／奨学金

2016　石橋財団国際交流油画奨学生 短期派遣
2019　官民民協働海外留学支援制度トビタテ！留学JAPAN 多様性人材コース第10期
2019　東京藝術大学「I LOVE YOU」プロジェクト 企画採択
2021　ギオン芸術スポーツ振興奨学金 2020年度奨学生
2021　公益財団法人戸部眞紀財団 2021年度奨学生
2023　令和5年度 文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業 企画採択

個展／主なワークショップ・個人企画

2020　「3D Chemical Drawing Workshop」
　　Oxford University Art Society, University of Oxford
2020　「映り」としての圧縮／群馬県桐生市 山治織物工場にてオンライン公開
2021　個展「Entropic Circulation 揺れのある循環」／北千住BUoY
2024　個展「まだ見ぬ識閾」（予定）

グループ展

2010 「言の葉展」／The Art Complex Center of Tokyo
2011 「源展」／吉祥寺ギャラリー悠
2011 「源展 II」／武蔵野美術大学 芸術祭展示
2011 「ARTIST IN DANCHI」／りえんと多摩平
2012 「僕らは生かされている」／武蔵野美術大学 芸術祭展示
2012 「進級制作展」／武蔵野美術大学
2013 Recover & Rebuild Japanese art & Design
第１回東日本大震災チャリティ展「Monster展」／渋谷ヒカリエ8
2013 「分解の座標」／武蔵野美術大学 芸術祭展示
2014 油画一年生展「ユガイチクエスト」／東京藝術大学 芸術祭展示 上野校地
2014 「取手アートパス2014」／東京藝術大学 取手校地
2015 コニカミノルタソーシャルデザインアワード 入選作品展示／新宿 コニカミノルタプラザ
2015 油画二年生展「～遊～」／東京藝術大学 芸術祭展示 上野校地
2016 「進級制作展」／東京藝術大学 上野校地
2016 平成28年度石橋財団国際交流油画奨学生 成果報告展vo.1
2017 「無二無二」／アーツ千代田3331
2017 「2074、夢の世界」展／東京藝術大学 大学美術館B2F
2017 油画四年生展／東京藝術大学 芸術祭展示 上野校地
2017 「石橋財団・東京藝大油画-海外派遣奨学生展」／東京藝術大学 陳列館
2018 油画四年生学内展「BE MY BABY」／東京藝術大学 上野校地
2018 第66回卒業修了作品展／東京藝術大学 上野校地・東京都美術館
2018 「near Phenomena」／西荻窪 中央本線画廊
2018 「0」／東京藝術大学 上野校地
2018 Life is Art展／長野県東御市 旧稚蚕飼育所 地下コンクリートスペース
2018 「対話する」／東京藝術大学 上野校地 学生会館2F
2019 「流れる瞬間、うつろう場所　Place out of Time」　瀬戸内国際芸術祭2019 秋期
東京藝術大学×シカゴ美術館付属美術大学 グローバルアート共同プロジェクト
2019 「Emergent」CSM MA Art & Science Open Studio／Elthorne Studios, London, UK
2020 「i promise you...」CSM MA Interim Show／Apiary Studios, London, UK
2021 第69回卒業修了作品展／東京藝術大学 上野校地
2021 ゲンビどこでも企画×ゲンビ「広島ブランド」デザイン スペシャル公募2020 ／旧日本銀行 広島支店
2021 群馬青年ビエンナーレ2021／群馬県立近代美術館
2021 バナナナイト／エースホテル京都
2022 環ジョウ交さ点／佐賀大学
2023 EKKYO. SUMMIT SENDAI 2023／東北大学 青葉山コモンズ
2023 EKKYO.SUMMIT+ 2023 SENDAI／せんだいメディアテーク

滞在制作

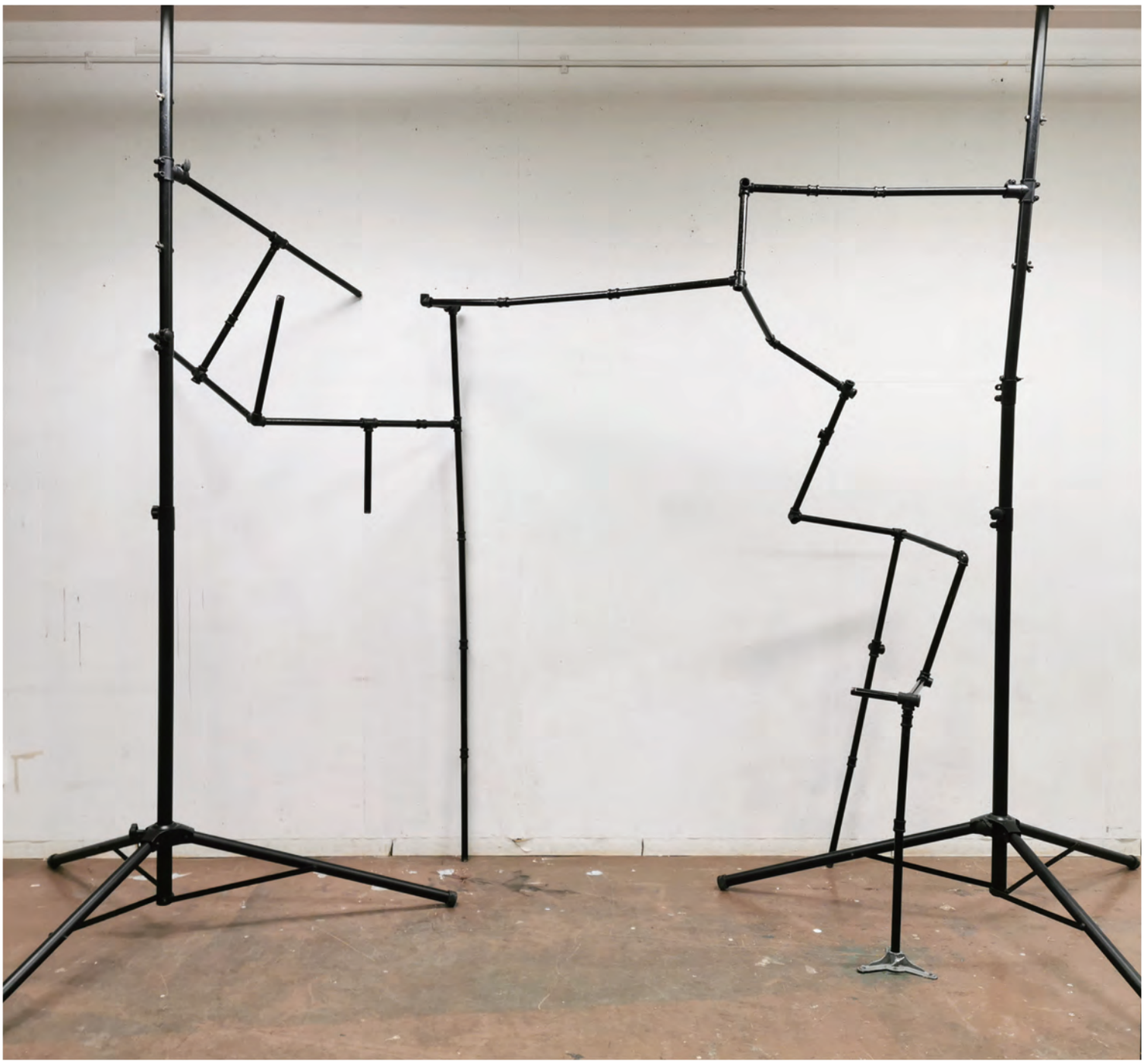
2011 「ARTIST IN DANCHI」／団地を改築したシェアハウス りえんと多摩平／八王子
2016 Gullkistan／Laugarvatn, Iceland　アイスランド、ロイガルバトン
2019 Cerdeira／Lousã, Portugal　ポルトガル、ロウザン
2020 Järvilinna Art Center／Jyväskylä, Finland　ユヴァスキュラ、フィンランド
2020 山治織物工場／群馬県桐生市

ツギハギの位相
The Catalyst for Dissolution / Emergence of Interface

Installation
Wood, paint, monitor, mirror, video camera, metal, plastic
2023
EKKYO.SUMMIT+ 2023 SENDAI ／せんだいメディアテーク

この作品は、「見ること」自体を見るためにある。平面上に描かれたり投影されたりしている何かを見る時、私たちはある圧縮された情報空間の中に意識を向かわせ、平面の中にのみ存在する異なる位相に触れている。その接触は、絵画の話において「イリュージョン」と呼ばれることがあり、私たちの身近でも映画を見る時のように日常的に起こり続けている。また、それらの位相／情報空間は、私たち個々人が持つ知覚と認識と感受のプロセスの中でさらにいくつもの位相に分岐し、私たちの網膜と記憶の狭間で重なり合ったり、ツギハギになっていたりする。かつてキュビズムの作家たちは多視点というアイデアをひとつの画面の中で構築したが、この作品では、私たちの生身の知覚のプロセスの中で「捉え切ることができない状況」をインスタレーション作品として展開しようと思う。モニターに映し出される像はビデオカメラによって捉えられており、自分が見ているはずなのに見られているような動きと出逢う。同時並行的に存在する完全に混ざり切らないそれぞれの像から、私たちの見ているモノが次第にカタチ作られていく。

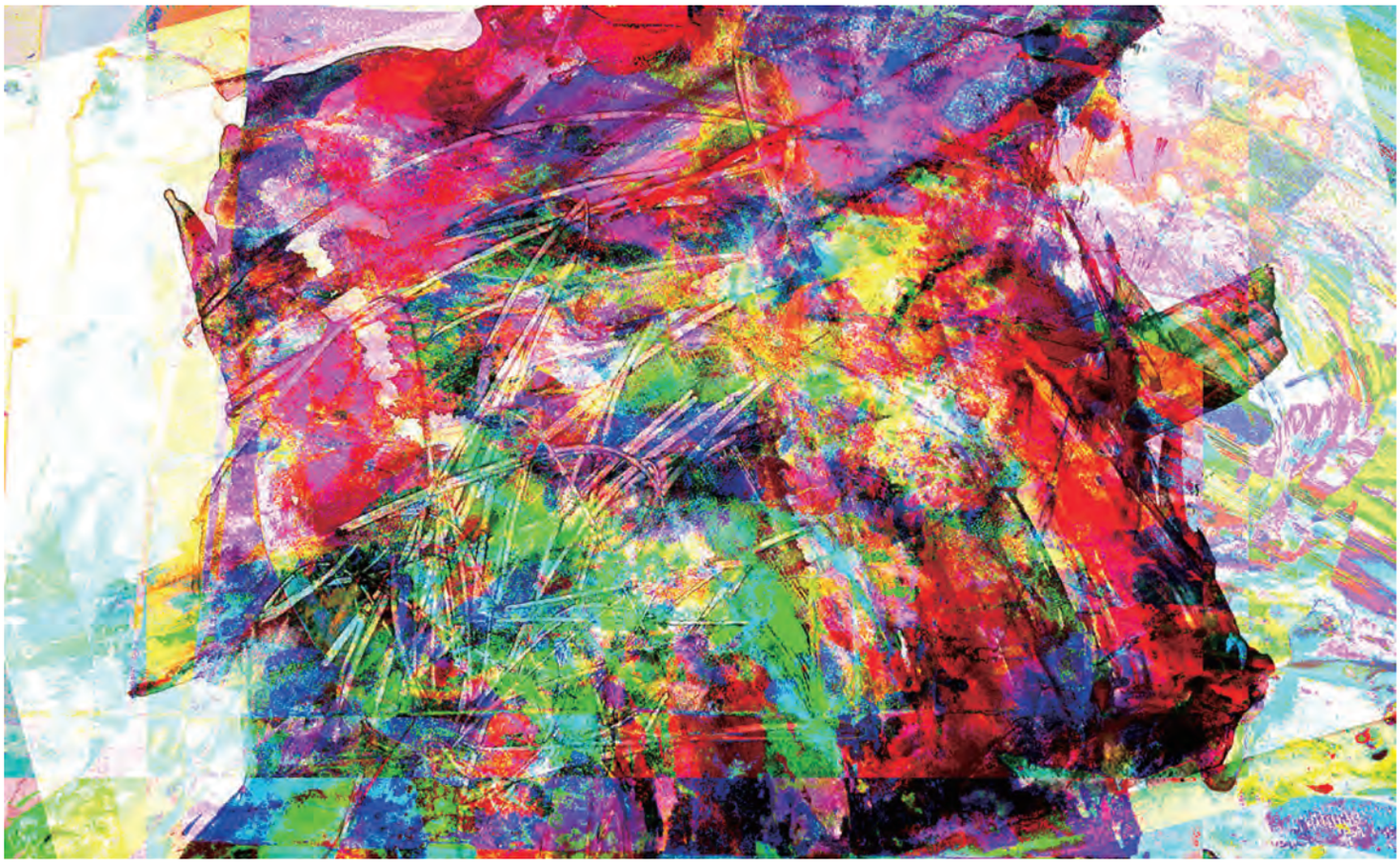
「ツギハギの位相」を解く
- 同一性から拡散される空間たち



≪私秘的な世界の暗号≫
Encryption of the Private World

2022-
Installation
Iron pipe
Variable size
EKKYO.SUMMIT+ 2023 SENDAI
せんだいメディアテーク

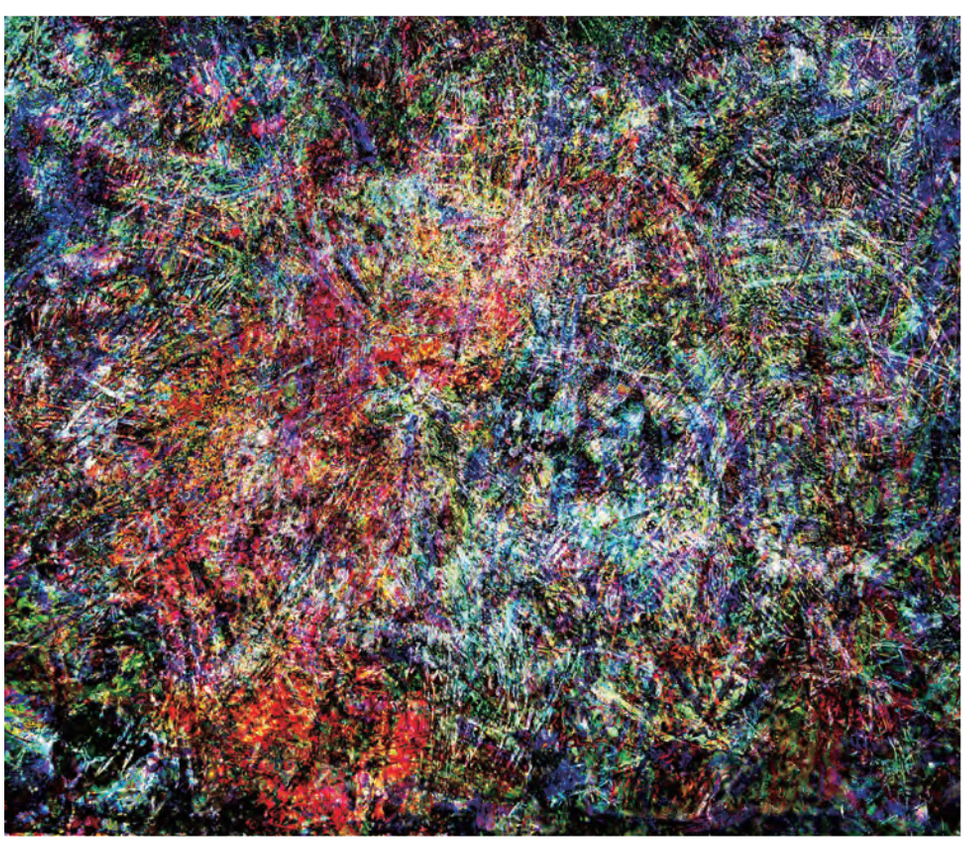
目の前にある「それ」は、究極的には何なのか知る術がないが、探り見る手段は色々ある。日常の中でも意識するまでもなく、私たちは抽象的なイメージや記号、言語を他者とのコミュニケーションのために代替的に扱う。ただ究極的には、その私たちの間を仲立ちする暫定的な暗号は、仕掛けた通りに解かれることはない。その代替的なアプローチを世界に発した発話者でさえ、その時点からの動きを伴うので、元の存在からと同じであるとは限らない。また、その暗号は解釈の数だけ解かれ続けて伝播していく。例えば鉄の支柱を２本立てて、その間を繋ぐとしよう。以前繋いだ時と同じように繋ごうとしても、恐らく全く同じ角度や立たせ方ではなくなる。私たちは絶対的な解を得られない代わりに、多数の不確実な解釈の実りを見ることがあり、その数多の不確実さを見ることで統合し、新たな問いを生み出していくのだと考える。



色と揺れ　Color and Flutter

2022　H300×W489.2cm　アナログで制作した作品をデジタルデータとして取り込み、レイヤーを積層
KYOBASHI ART WALL 2022 奨励賞

　常に存在しているのに、極めて言語化しづらい現象として、「色」がある。色は、それ自体のみで存在しているわけではなく、私たちが視覚を通して「見ること」によって初めて「在る」と感じることができる。私たちの固有の網膜の中でのみ解読することができ、個体差による揺れがあり、本当の意味においては他者と共有することができない。
今作では、描いたドローイングをいくつか重ねてイメージを作ることで、光の波と私たちの身体が出逢うことで生まれる「色」の発現を体感的に感じられるような状況を作り出そうと試みた。積層されたレイヤーの中で、私たちの網膜の中で、いつも色は揺れ動いている。

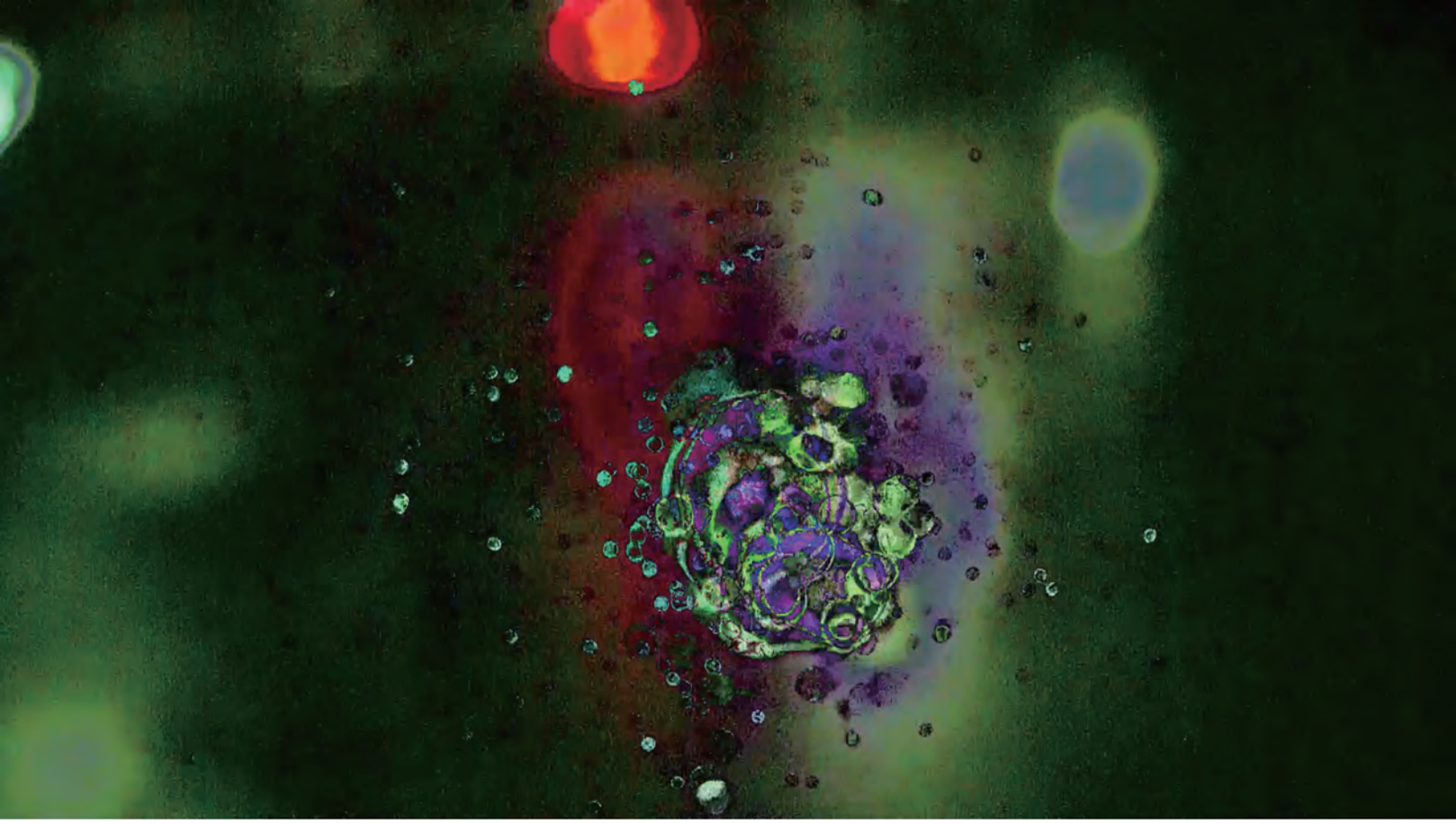


Everlasting Tracing

Created in analog and converting them into digital data, then layering the layers
H 401×W 467mm
2009, 2023

昔自分が描いた絵には、「描いた」と言うよりもペインティングナイフで「彫られた」と言った方が近いほどに、無数の「描き跡」が存在した。デジタル上に取り込み、Photoshop を用いてその「描き跡」を浮かび上がらせる。これはまるで遺跡から発掘したばかりの未知のオブジェクトからかつての文明を探るような営みのように思えた。

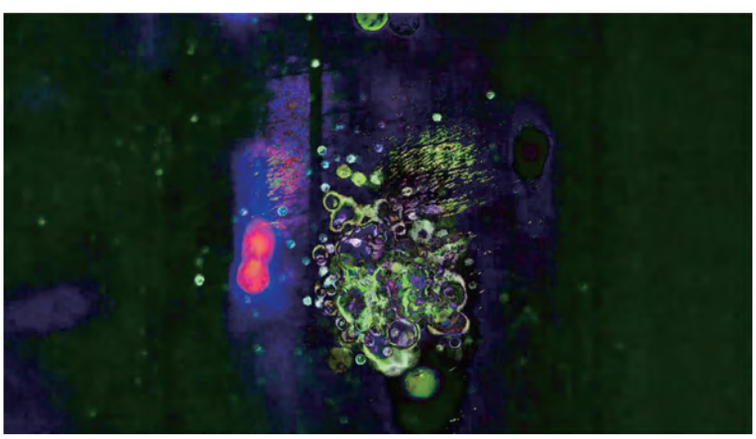
かつての自分が残した痕跡を自分自身で辿ることは、終わりのない描き続ける絵を描き続けることのようにも思える。

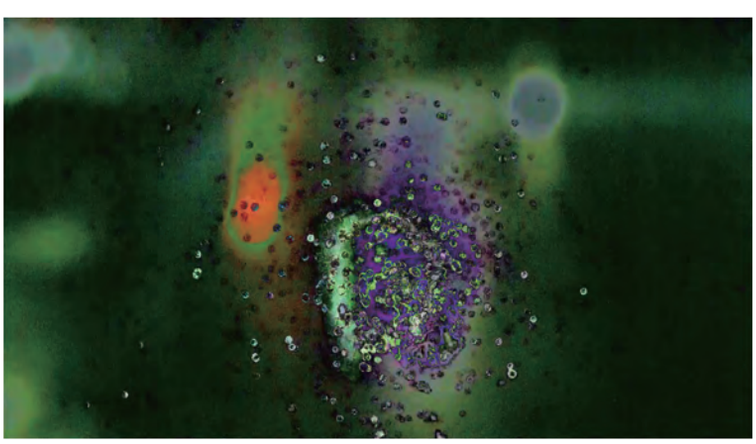


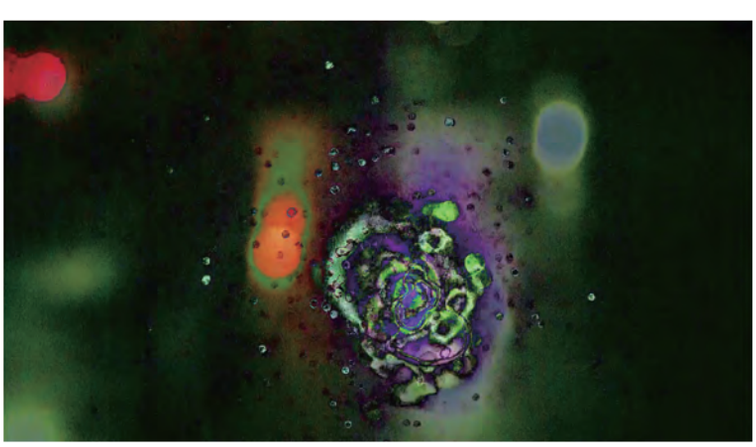
雨の中の虹／ Overlapping Raining

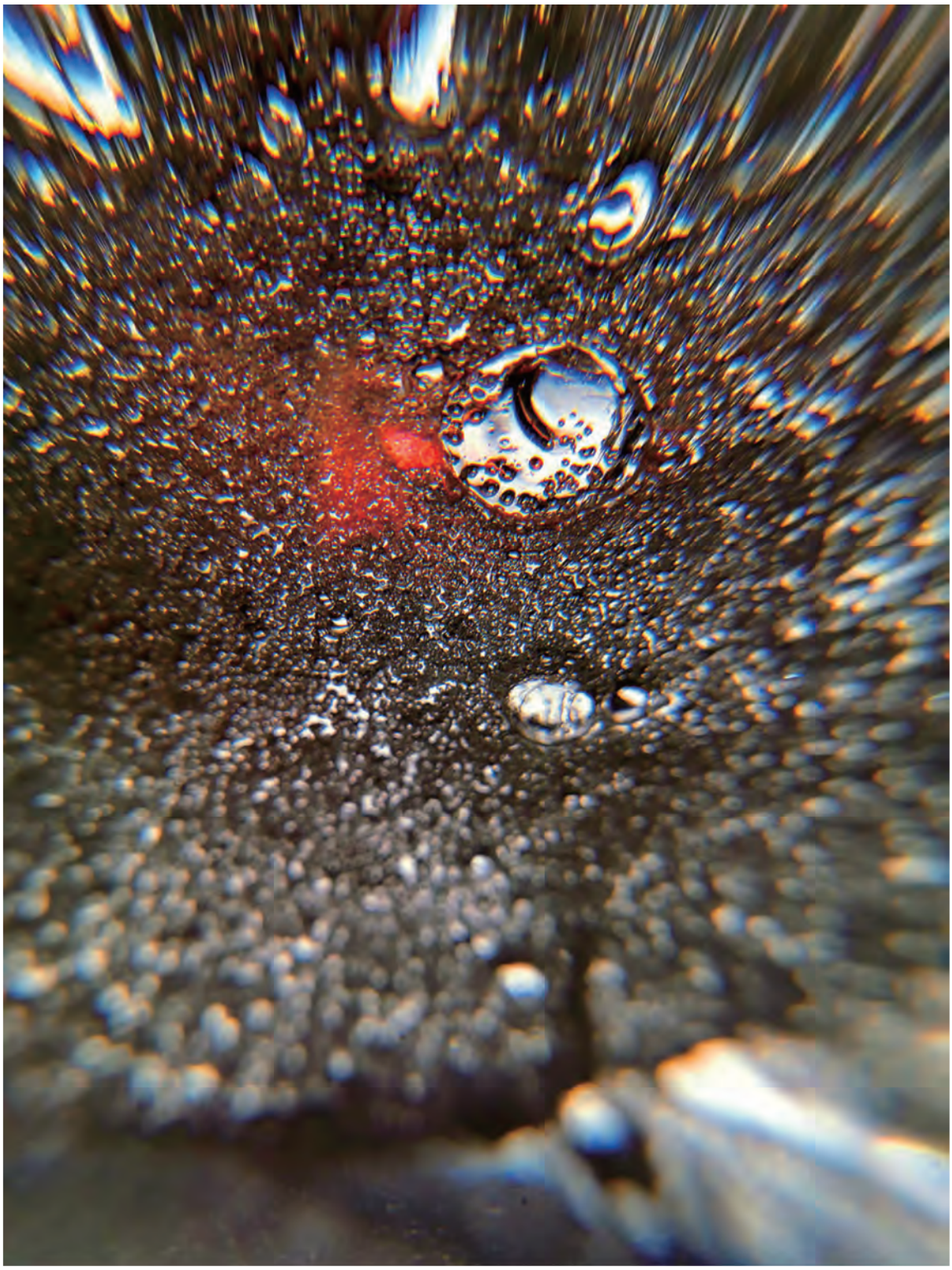
Video
0:54
2016, 2023

雨上がりに虹が見えることがあるが、虹色自体は私たちがスペクトルを感じることができればそこに現れる。もし眼前に在るのが降りしきる雨の連なりであったとしても、そこに虹色を見ることができる。例えば、雨を多角的に捉えた映像をひとつに統合する時、その動きの差分から虹色に近似する新しい色の並びに触れることもある。



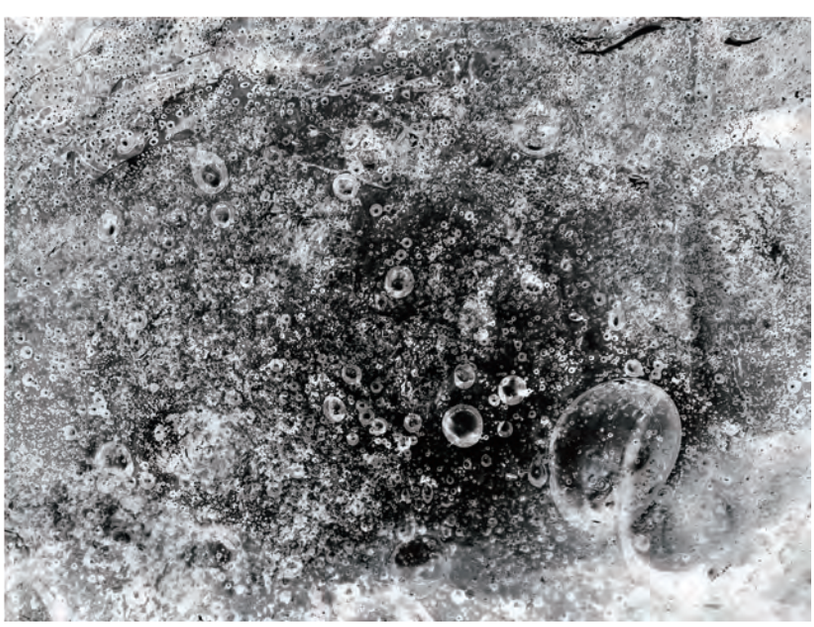






Alternative rain

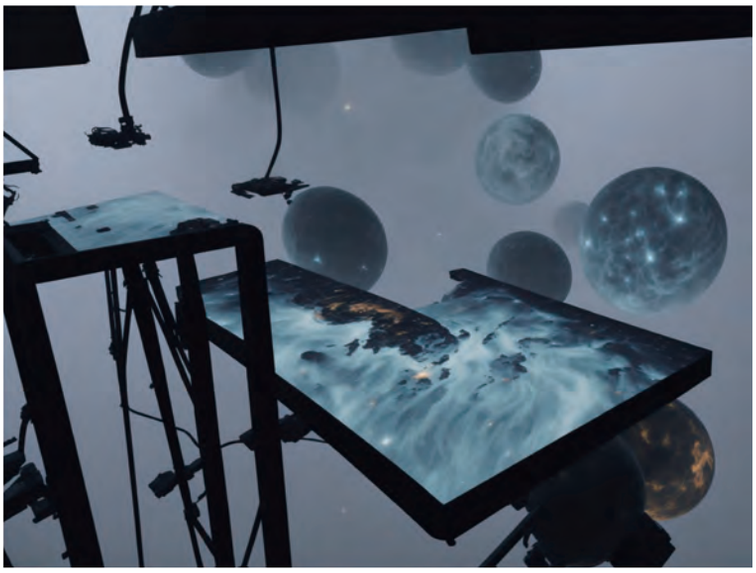
Photograph
H 309×W 232 mm,
H 325×W 434 mm
2023

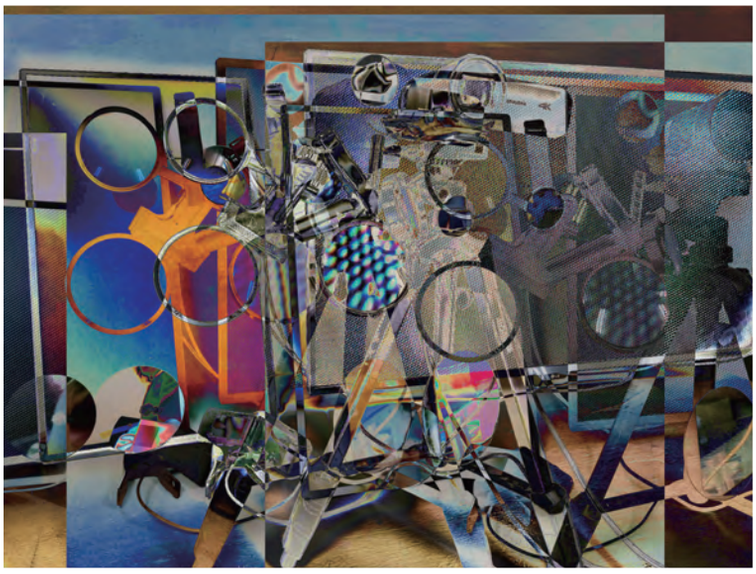


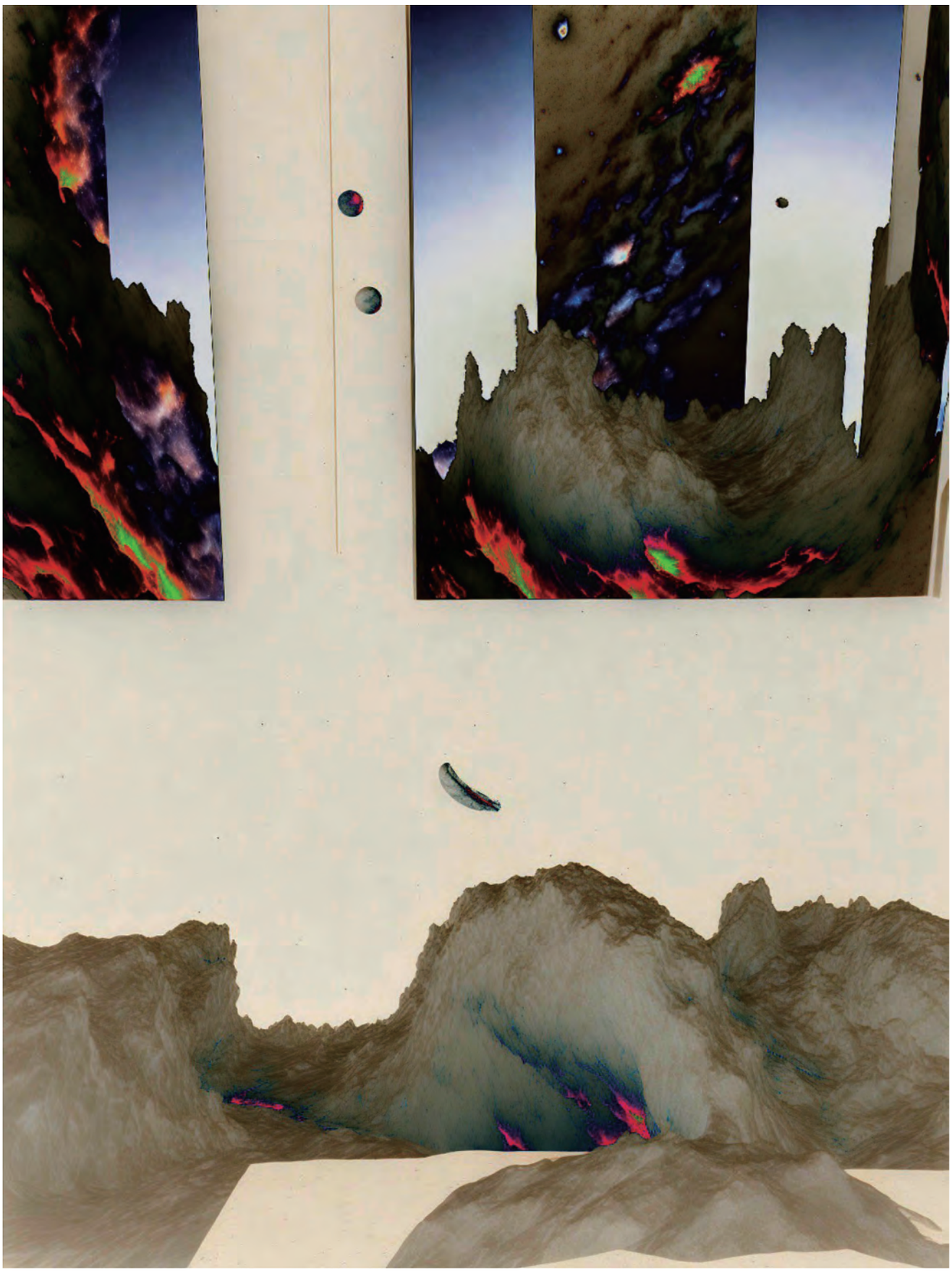
Alter Installation

2023
Digital image
Installation photograph, prompts through Leonardo.ai

任意のデータからイメージを生成する AI に少し興味があり、色々な画像生成を試していた際、自作のインスタレーション作品を取り込んで出力したデータを見て、何だかとても妙な気持ちになった。私が作ったはずの「場」を、私が見ていたはずの空間を、私の指示を元に AI が何とか解釈をして画像データとして新たに描画している。そこになかったはずのモノが描画されており、あったはずのモノが消されている。取り込んだ画像が既に撤収済みのインスタレーションの画像で今は現実空間に作品として存在していないこともあり、何か現実が上塗りされる可能性のようなものを感じて自分の中で緊張感が走った。ただ、そのことは奇妙ながらもリアルにも思えた。「解釈」とはそういう類のモノだと思うのだ。日常会話の中で生じる「解釈の差異」に生じる違和感を不意に可視化されたような感じがする。絵画が「イリュージョン」を包含しているように、現実の情報を平面の画像に落とし込む際、寸分違わず見た通りの状態にはならない。純粋なファクトはもはや存在できず、在るのは現象と解釈だけで、この世界の無限に連鎖する情報の中を、私たちは解釈という手段で何とか世のカタチを保っているようにすら思えてくる。インスタレーションのイメージも、概念も、「場」の自体も、異なるどこかで、解体された後で、再び動かされることがある。





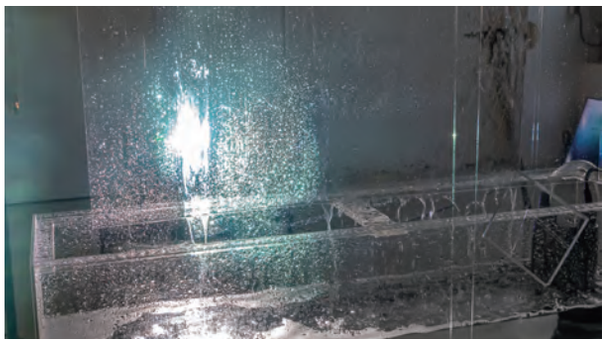


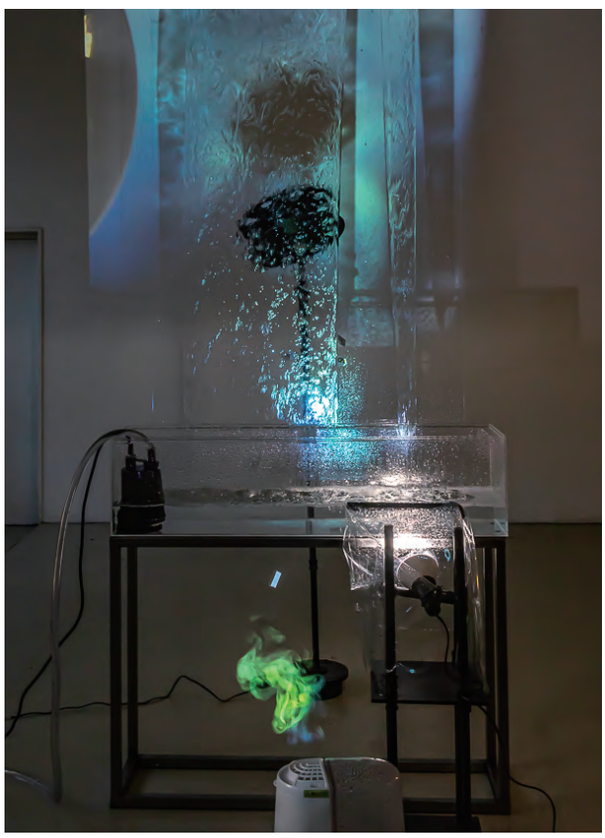
どこかのタイムライン
In a Parallel Timeline
2023
Digital image
Installation photograph, prompts through Leonardo.ai,
finally adjusted by using Photoshop

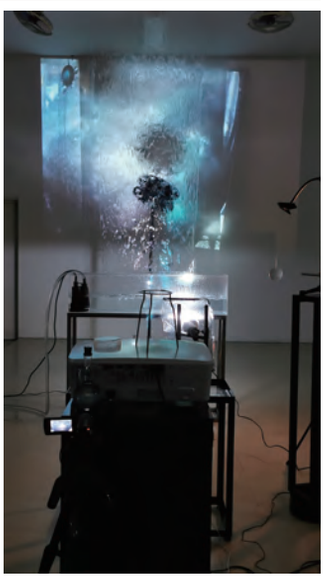
見世ル装置／暗号
Installation for Showing / Encryption
2021
Installation
『環ジョウ交さ点』
佐賀大学・東京藝術大学・情報科学芸術大学院大学 (IAMAS) の
三大学の学生有志による芸術交流展
佐賀大学にて展示
Collaboration Exhibition between
Saga University, Geidai and IAMAS

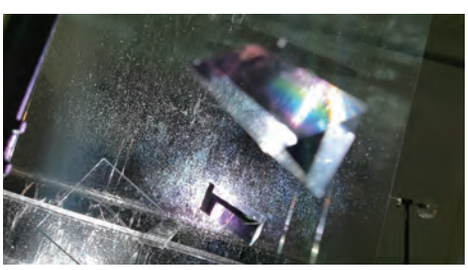
これは、見ることを見せる／見せることを見るための装置であり、
私たちの内側で起こる、ある種の暗号の生成と消失を見るための設えである。

昨今の世界では、誰の目線で語られているのか定かではない情報が氾濫している。見ていることが見られていることになるような、見せることが見ることになるような、ぐるぐると回る情報の移動だけが見える。私は無意識のうちに「これ」を解読しようとしていることに気がつく。何か気になる物事の前をただ通り過ぎることもできるが、立ち止まって見ようとすることで、名の無い諸現象は私たちの意識の内側で暗号として立ち現れていくのかもしれない。ビデオカメラやプロジェクター、外界からの影響で静かに変化し続ける水槽を設置し、見ることを見せる／見せることを見る装置として設えることで、私たちの内側で起こる暗号の生成と消失の瞬間を垣間見ようと試みる。







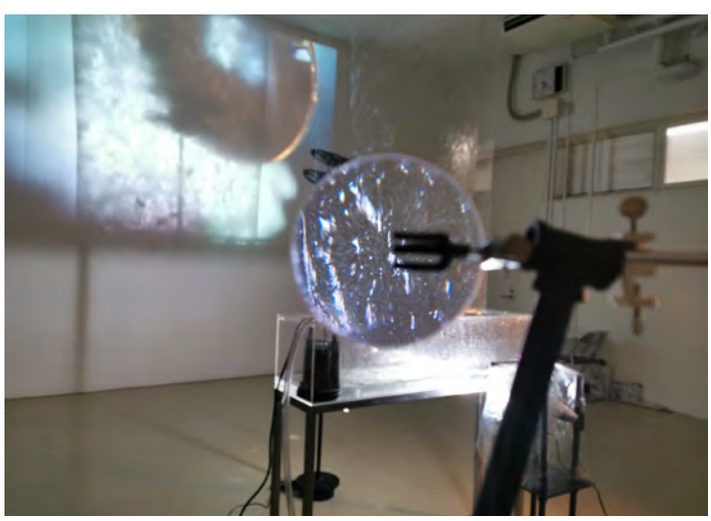


不可逆なオーバーラップ
Irreversible Overlap

インスタレーション
カメラ、三脚、モニター、テーブル、木材、ガラス、金属、プリズム、プラスチック

2021
修了作品
第 69 回 東京藝術大学 卒業・修了作品展
京成電鉄藝術賞

この作品では、液体や光の不可逆な動きを重ね合わせることで予期せぬイメージと邂逅することを目的としている。私たちの暮らす世界は、人工的なシステムが制御するものが随分と多くなってきた。何をするにしても、元来の自然環境からは遠く離れ、テクノロジーが付き纏う。2020 年から現在に至るまで続いているパンデミックでは特に顕著であったが、私たちの呼気はマスクによって制御され、私たちの体温は記録され、外界とのコミュニケーションには必ずと言えるほど鉄の板が挟まるようになった。その世界の中でただ存在していると、自分が何かを見ているというより、情報を見せられている感覚があった。私たちは本当に見ているのだろうか。そのような思いから、修了制作として不可逆な現象が重なり合う瞬間を目撃し、見ることについて思索するための空間を設えた。「見ること」を起点として、機械と人間の間にある自然現象に目を向けることで、知覚によって重なり合って生まれる感覚を、私たちの網膜の中で感じることができるのではないだろうか。
また、これは電子機器によって作り出される制御された人工的な光や動きであっても、重なり合う、あるいは散乱していく状況を目撃することで科学技術を自然の状態に還そうとする試みでもある。たとえ人工物で世界が埋め尽くされ、原生林的な自然から遠く離れたとしても、自然現象と出逢う実感が身体にある限り、人間はどこまでも自然を感じることができるのだと信じたい。



仕切りを解かすための触媒
Catalyst for Dissolving a Partition

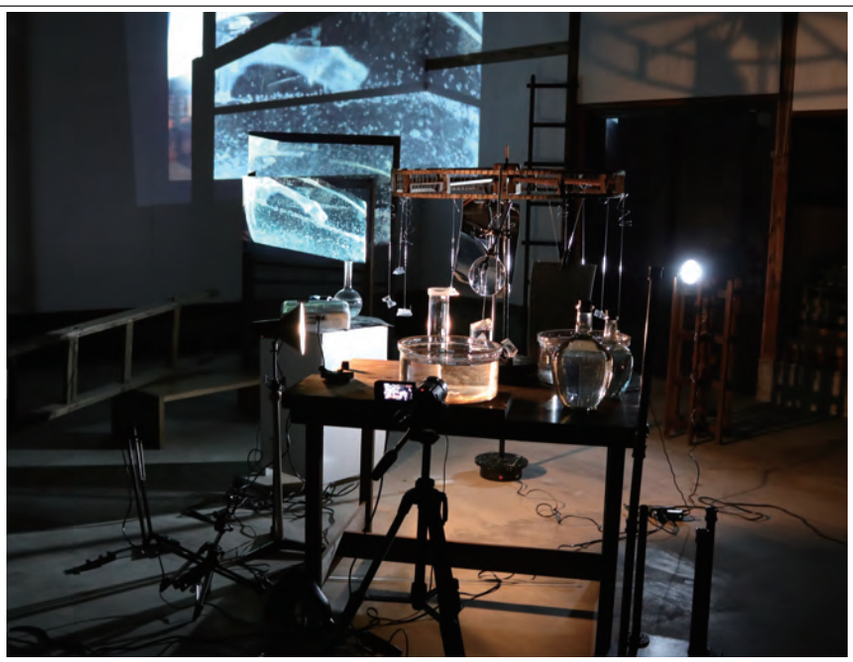
インスタレーション
木材、塗料、モニター、ビデオカメラ、金属、プラスチック

2021
「ゲンビどこでも企画 × ゲンビ「広島ブランド」デザインスペシャル公募 2020」展　入選作品
旧日本銀行広島支店にて展示発表

(コンセプトテキストより)
　過去に仕切られた場所はずっと仕切られ続けるのだろうか、あるいは、「仕切り」は設置された場所をずっと仕切り続けるのだろうか。はじめて展示場所の写真を見た時に、一番気になったのが仕切りだった。役割を終えたはずの設えが、まだその機能を持ち続けていることへの興味と、建物があり続ける以上、たとえ人間がいなくなったとしてもその機能が続いていくという果てしない畏怖の念のようなものを感じた。特にこのパンデミックの状況の中では、感染予防のためにアクリル板や ZOOM の画面などに仕切られてばっかりだったということも仕切りに興味が湧いた要因のひとつである。

役割が消失した機能に人間が再び関わりを持つにはどうしたら良いだろうか。今回はそのような興味から、仕切りに直接手を加えるのではなく、間接的にその仕切りを開放することは出来ないだろうか、と考えた。仕切りの近くに仕切りに似せて制作したオブジェクトを設置し、反対側からカメラで観測する。そして、正面のモニターにカメラで観測した向こう側の「今」を映し出す。実際に見える今と、本来は同時に見ることができない反対側の「今」が同時並行的に見えるように設置し、「過去に仕切られた場所」を融和することで、過去の事象と今起こる現象による対話を試みる。

仕切られたり、カテゴリーで分けられたり、分断されたときに、直接融和することがなかったとしても間接的にそれらを解くことは可能なのかもしれない。作品が触媒として機能し、私たちの知覚する現象と、そこから生まれる意識の反応する中で、仕切りは解かされる。

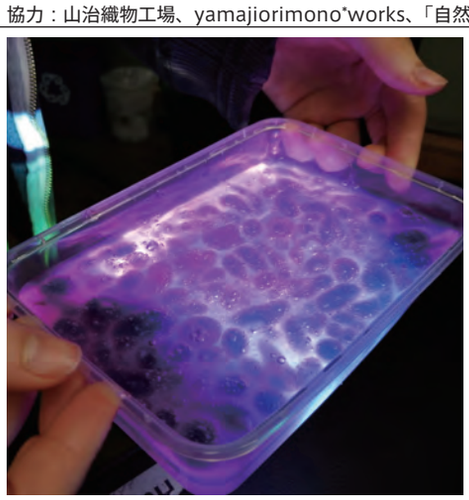


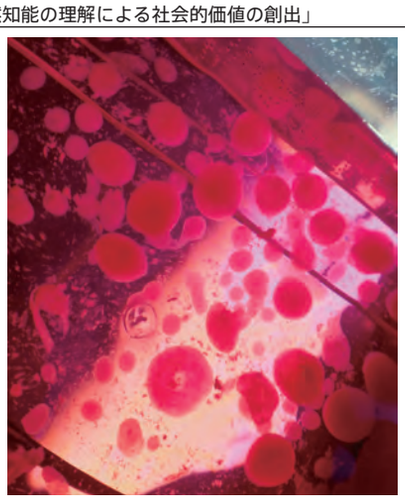
「映り」としての圧縮／ Reflection as Compression

ライヴインスタレーション、オンライン企画
カメラ、三脚、モニター、テーブル、木材、ガラス、金属パーツ、プリズム、プラスチック、以前工場で使用されていた木製パーツ
2020
東京藝大アートフェス 2021 企画採択
制作・配信場所：山治織物工場（群馬県桐生市）

「映り」をテーマにした企画で、実際のインスタレーション空間の中で起きる現象をビデオカメラでリアルタイム映像として取り込み、「映す」ことからイメージを作り出した作品制作。その様子をオンラインでライブインスタレーションとして配信した。また、東京工業大学の原正彦教授をゲストに招き、これからのアート × サイエンスについて議論するトークイベントも企画した。

企画・制作：諏訪葵
助成：東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクト
協力：山治織物工場、yamajiorimono*works、「自然知能の理解による社会的価値の創出」





Chemical 3D Drawing Workshop

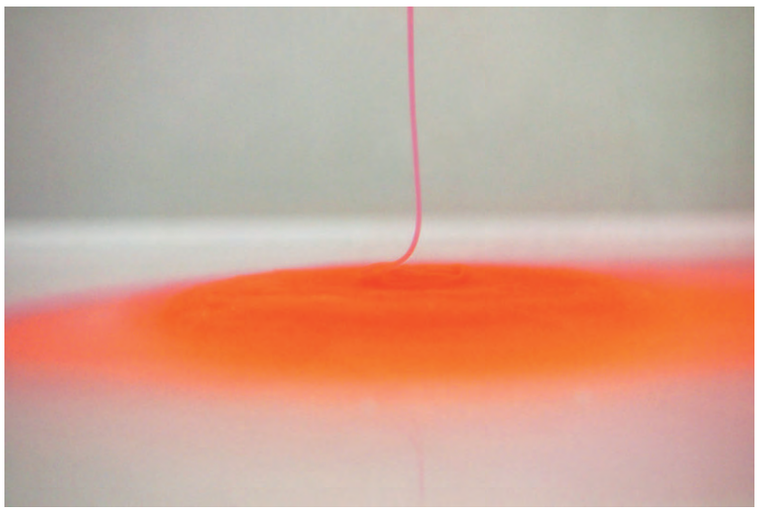
2020
乳酸カルシウム、アルギン酸ナトリウム、レモン汁、プラスチック容器、紫キャベツから採取したアントシアニン水溶液、水
オックスフォード大学のアートクラブ内で
Art&Science のワークショップとして実施

「描く」という行為をキーワードに、今までの化学反応をアートとして捉えるアプローチを ワークショップという形に展開した化学 + アートの企画。描いた痕跡が半永久的に残るものでなく、その時その時の刹那に存在するというコンセプトを、今まで作品の中で用いてきた化学反応のプロセスをダイレクトに使用して企画した。
オックスフォード大学内のアートクラブで実地（参加者 20 人 + クラブのサポートメンバー数人規模）。また、紫キャベツから取れるアントシアニンを使用するなど、植物から取れるエコな材料を使用し、終わった後も生ごみのように処理できるサステナブルなワークショップでもある。

邂逅
Encounter

F40
2018
NONIO ART WAVE AWARD 2019
準グランプリ受賞
「NONIO」商品パッケージ化作品

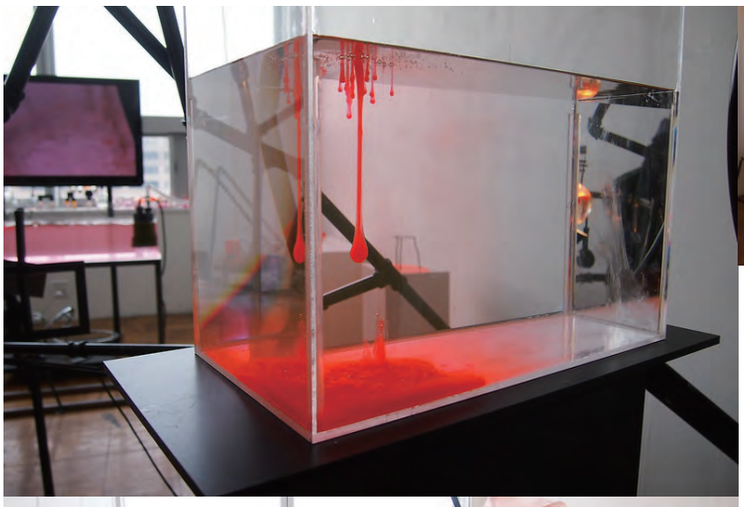
アナログの絵画のイメージを PC に取り込み、PC 上で彩度やコントラスト、色相などの値を変更し、オリジナルと異なるサイズのキャンバスにプリントした。アナログとデジタルの狭間で常にせめぎ合っているような感覚が日常の中にあって、視覚化を試みた作品。

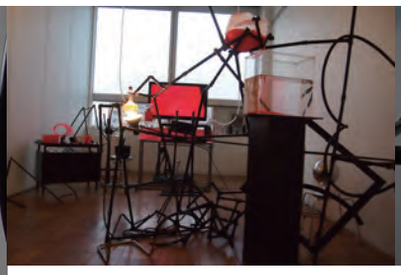


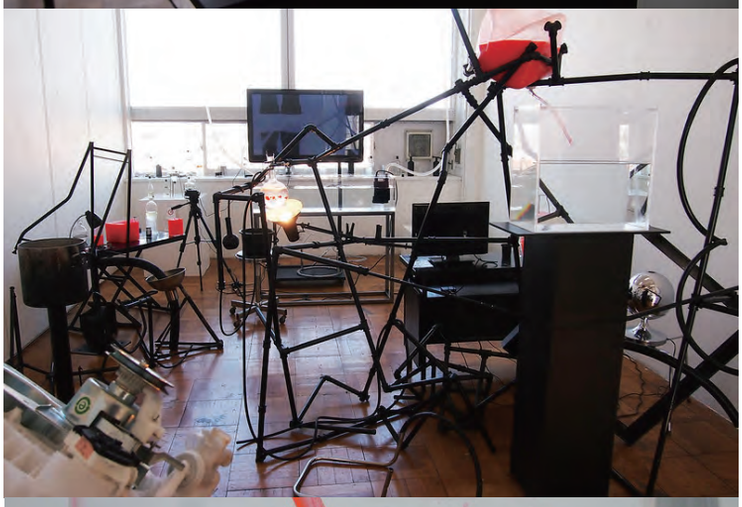
抽出／描画
Extract / Draw

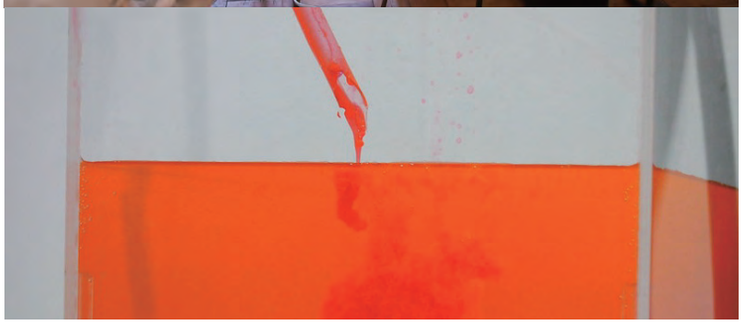
デジタルフォトプリント
A3
2018
NONIO ART WAVE AWARD 2019
準グランプリ受賞
「NONIO」商品パッケージ化作品

卒業制作「現象と表象」の中で起こった現象の一部を改めて写真として収めた作品。スライムが段々生成されて堆積していく途中で撮影した。自分の制作が描くことから始まったせいか、インスタレーションを作っていても根本には描く感覚があり、自分の外部にある現象を捉えること、それ自体が私の場合は描くことになっているのかもしれない。物質が元にあった場所から取り出されていくこと、それ自体が描画になるような感覚として体感している。









現象と表象
Phonemenon & Representation

インスタレーション
液体、アクリル、ガラス、金属、ディスプレイ、木材、
ビニール、プラスチック、塗料、ライト、モーター

2018
卒業制作
第 66 回卒業修了作品展
東京藝術大学 上野校地 絵画棟 5F、
東京都美術館（サテライト展示）
O 氏記念賞

学部の卒業制作として、さまざまな科学的な現象と出逢うための実験室を制作した。水槽の中に赤い液体がだんだん滴下され、化学反応によってスライムが生成される仕組みや、ランプの熱で温められた液体がフラスコ内で対流を起こし、ラバランプのように縦横無尽に運動するシステムを設えた。今作の中で整然とオブジェクトを設置するのではなく、黒い鉄パイプやホースを用いて部屋中のオブジェクトが混然一体となった状態を作り上げた。これは、新しいテクノロジーとそれに伴う膨大な量の情報によってますます複雑化する現代社会の体現でもある。また、この作品は美術館と大学の両方で同時に展示したことで、同時並行的に物事が起こる今日の社会のリアリティも表そうとしたものである。数多くの科学的現象から影響を受けながら変容し続ける、視覚的な場を作りたいと考えている。